

表浜漁協女性部の『再出発』

表浜漁業協同組合女性部
阿部 真喜子

1 地域の概況

宮城県牡鹿町は、無限の宝庫太平洋と緑の山々に囲まれた自然豊かな観光と漁業の町である。古くから沿岸捕鯨の盛んな町で鯨肉の配給でも知られている。

私の住む表浜地区は、霊場金華山を東側にのぞみ、牡鹿半島の突端に近い南側に面した国宝十一面観音のある小淵、給分、大原、小網倉の四つの浜を有する漁村である。

2 漁業の概要

表浜漁業漁業協同組合は、牡鹿半島の東部に位置し、金華山沖の親潮と黒潮との合流海域としても知られる世界三大漁場の一つとして、マグロや鯨が多く生息し、魚の種類豊富な海を漁場として有し、ミネラルを含む外洋水を栄養源とする、かき養殖、若布養殖、海苔養殖などの海面養殖漁業にも恵まれ、また、漁船漁業は、真穴子、イカナゴ、メロイド、イサダそれにイカ釣り、サンマ漁など一年中漁業を営むことができる。

現在、漁協組合員は311名（正組合員215名、准組合員96名）となっており、平成14年度の販売取扱高は20億5千万円で、その主なものは、かき養殖8億5千万円、若布養殖3億円、海苔養殖2億3千万円、漁船漁業6億7千万円である。

当地区ではこのように各種漁業が盛んなため、漁業に従事する若い後継者が多く戻り、活気に溢れる漁村・漁業となっている。

3 女性部の組織と運営

私達の漁協女性部は、平成13年2月17日に再発足し、現在の部員数は119名で小淵、給分、大原、小網倉の四つの浜に支部を設け、各支部から合わせて30名の役員を選出しその中から部長1名、副部長兼支部長4名それに会計2名、監事2名で表浜漁協に事務局を置き、部員の会費一人千円、親組合の助成金20万円で運営している。

4 課題設定の動機

私達の地区では平成3年7月の漁協婦人部の総会において高齢化による部員の減少などの理由により解散が決まり、その後活動が休止されていた。

このため組合下部組織であるカキ、海苔、若布、漁船漁業の各団体が開催する各種行事や魚食普及活動などはそれぞれの団体の奥さんたちが協力して支えてきた。

トレーサビリティ問題、消費者の魚ばなれ、地域の高齢化の進行、コミュニケーションの希薄化等、漁村・漁業を取り巻く環境は大きく変化してきている。

これらの情勢を踏まえ漁業及び漁村振興を図るためには、組合員のみならずやはり女性部の力が重要と言うことになった。

5 実践活動の状況及び成果

※設立準備委員を選出し各浜で懇談会

漁協では、以前にも女性部組織の必要性を感じ、各浜を回り何度となく集会を開き女性部の再結成に向け努力したが、一度解散した組織を立ち上げるのはなかなか難しかった。

そのことを踏まえ、組合の指導と協力を受け、四つの浜から規模に応じて44名の設立準備委員を選出した。設立準備委員には組合長、担当理事にも参加してもらい委員が分担して各浜を回り懇談会をもった。

懇談会では、解散要因についても反省検討してもらったところ、役員の高齢化に伴った感覚のズレや若い世代との意見の相違、役員が少数のため部員に情報が伝わりにくい体制になっていたことがあげられた。

また、これからの女性部活動については、「組合や上部組織への協力だけでなく自分たちがやりたいことをきちんと話し合い、若い人の意見を取り入れた活動にした方がよい」との声があげられた。

※35名の設立発起人で部員を募集

各浜を回っての懇談会のあと35名の設立発起人を選び、各浜から選ばれた発起人が部員の募集にあたった。結果、婦人部時代の倍の120名の参加で全体会議を開催することが出来た。

※表浜漁協女性部再結成

平成13年2月、名称も婦人部から女性部とし『表浜漁協女性部』が誕生した。各浜の活動をしやすく、連絡の取りやすい体制にするため、四支部合わせて30名の役員を選出し、女性部長を先頭に私たちは活動を始めた。

※部員が一丸となって山と海の交流会

発足直後、組合から「JAやまがた」と姉妹協同組合として業務提携を結ぶので、その一環として「JAやまがた女性部」との交流をしてはどうかとの話が持ち上がった。女性部で話し合った結果、表浜の海産物を紹介する良い機会である、また、農協女性部の活動も参考にしたいとの意見が出て、表浜漁協女性部としても参加することにした。

私達女性部を含めた一行は、四トンの保冷車、二トントラック、バスと乗用車を連ねて早朝に表浜を出発した。

「JAやまがた」では、50周年の記念事業の中で表浜漁協との業務提携書に署名した後イベントが始まった。イベントは規模が大きく、山形市内展望のヘリコプターが飛んだりして大変な賑わいだった。

JAやまがた産の野菜、花、果物、米などの農産物が所狭し並べられ即売された。そばに、私たち表浜の海産物も展示し、試食を提供しながら販売をした。

獲りたてのイカ、秋鮭、穴子、シャコエビ、鮮カキに若布など、浜の母ちゃん自慢の腕で捌いた魚を調理し、試食をしてもらいながら販売した。大勢の人を前にした魚捌き、試食販売など、初めてのことであり最初のうちは緊張してあまり声も出なかった。慣れてくるとそこは持ち前の浜言葉でお客さんに呼びかけ、持って行った海産物は完売となった。

帰りの車の中は、魚や若布にかわって、野菜や漬物などのおみやげで一杯になった。女性部発足直後の山と海との交流会は女性部にとって大きな収穫があった。それは部員間の結束であり、山と海と物の交流、人と人との交流だった。

表浜に帰ってきたのは夜中、参加した女性部員は初めてのことばかりでかなり疲れたが、自分達にもできたという充実感で一杯だった。

※その後も続く人と物との交流

その後「JAやまがた」からは、サクランボ、ラ・フランス、私たちの方からは、塩蔵若布など毎年季節の特産物の交流販売を継続している。物や人の交流だけでなく、漁業、農業に対する理解を深める機会ともなっている。

※幅を広げる女性部活動

女性部の地域活動としては、毎年の「海の日」に行われる海岸清掃、海をきれいにする運動（合成洗剤追放運動）などを行ってる。また、去年から地元で獲れる食材を使った料理講習会を始めた。部員の大半が昼間は働いているので講習会は夜の実施となるが、60名程の部員が参加し大好評で、今年は3回実施している。

6 波及効果

(1)再出発した女性部は、役員世代交代、活動内容の見直し、部員の意向の反映、情報の伝達に努めた結果、地域の中でも一目をおかれ地域活動であてにされるようになった。

(2)「JAやまがた」との年1回の交流から、地元石巻地域の農業者との交流も取り入れ、積極的な交流に発展してきている。

また、交流会を続けているうちに部員の考え方も変わってきて、個人で海産物の販売許可を取り、インターネット販売を行う人も出てきた。

(3)女性部活動が活発化するにつれ、女性部活動に積極的に参加し、個性を発揮する女性部員が増えてきた。

7 今後の課題

交流会では後継者の問題、経営、文化の違いなどが話題になり、漁業と農業との違いを知ることが出来た。農業の場合は自分達で種子を蒔き、手を掛けて育て、それを収穫選別し出荷する。これらの過程で、生産物の付加価値を高めることを真剣に考えており、生産物の取扱い方、消費者ニーズの受け止め方に敏感であり、漁業が一次産業で留まっているのに対し、農業は一・五次産業、二次産業であると感じる。

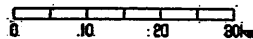
交流で学んだことをどの様にして実現させるか、そしてそこに女性部としてどの様に係わっていくかが課題だと考える。

地域のこと、漁業のこと、家庭のこと、さまざまな場面で女性部が主体性をもって行動出来るよう、部員の一層の意識向上に努め、その行動力で身近な問題を解決していきたい。

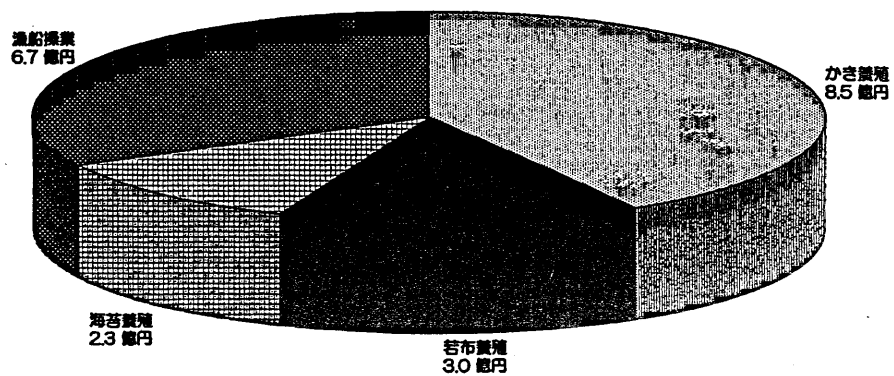
手始めに、石巻地域では女性農業者の人達が直売所を設け地産地消に頑張っているのだから、交流を深め、海産物コーナーの設置を働きかけ、私たちも地産地消の一翼を担えるよう頑張っていきたい。

恵まれた漁場、自然豊かな漁村環境、そして、新鮮で安全な食べ物を次世代にしっかりと引き継いでいきたい。

宮 城 県

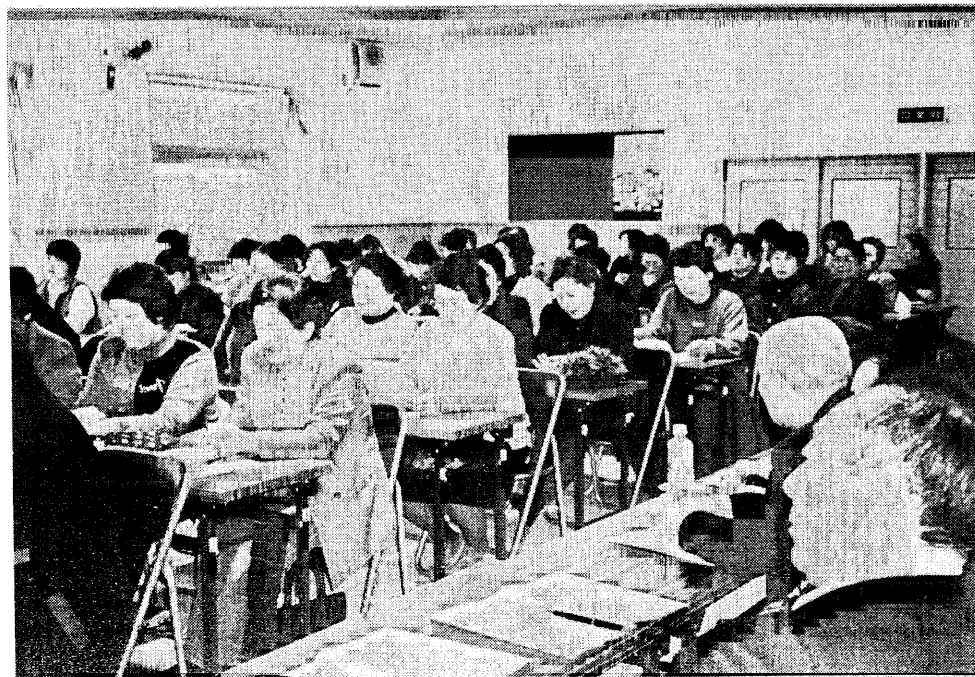
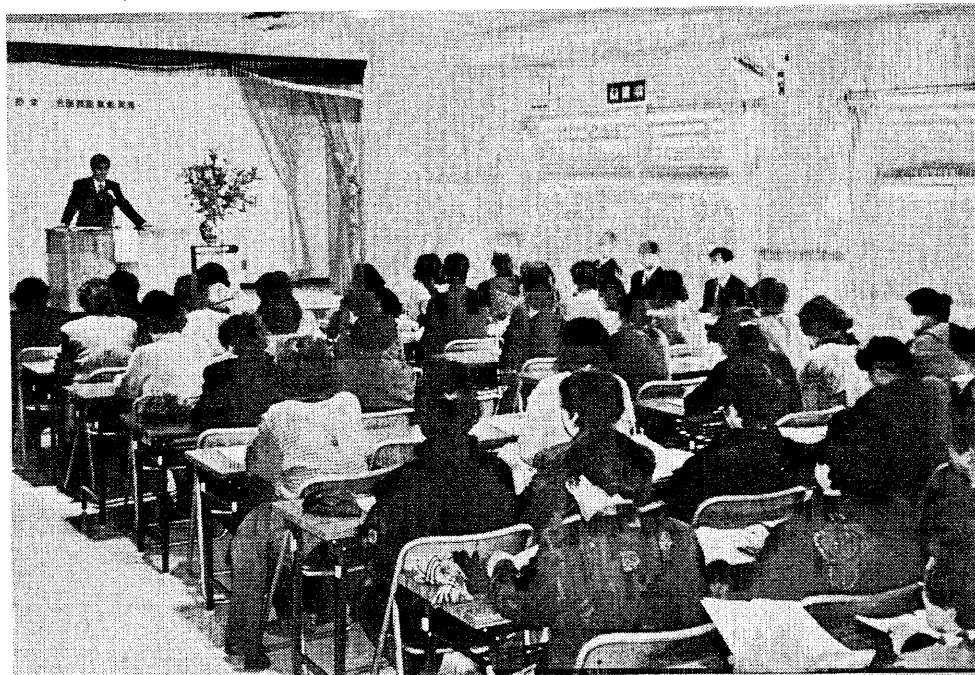


平成14年漁協販売取扱高 20億5千万円



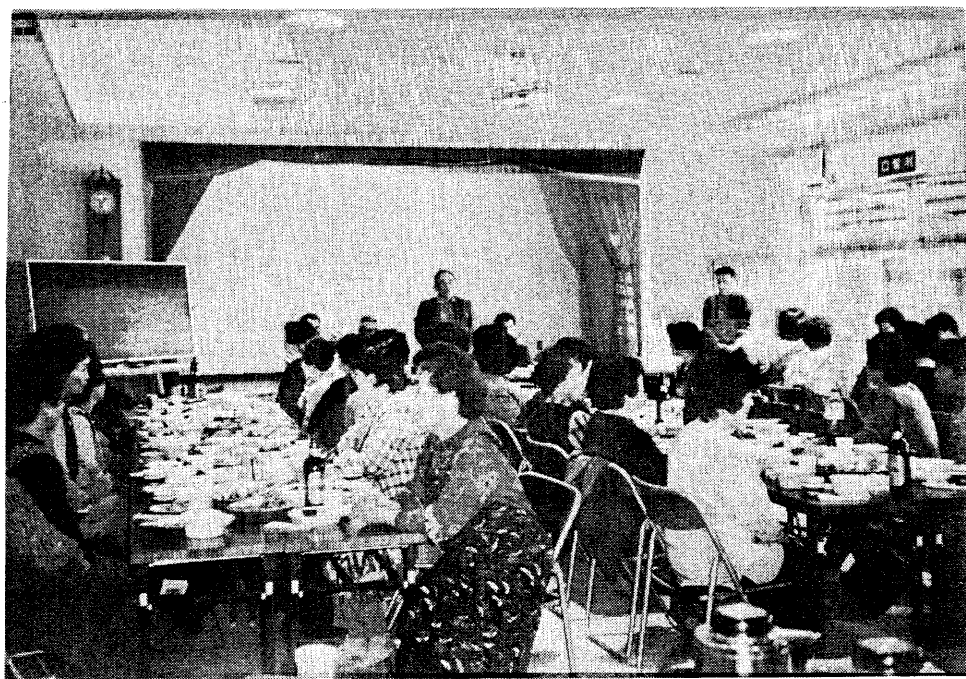
表浜漁協：女性部設立総会

【 会員数 120名 で 再出発 しました 】



J A やまがた女性部との交流会

【 活動 の意見 交換後 かき フライ等 海の幸
で おもてなしいたしました 】



海浜清掃

【 7月20日の海の日には漁協傘下団体
みんなで 浜の清掃を行います 】



河南町農産物直売所「やさいっ娘」さんと交流

【朝上げ 殻付き カキ を 焼いて振る舞い

新鮮カキの美味しさを味わって頂きました】

